Research goals of the Faculty

芸術文化学部の研究･制作目標

富山大学芸術文化学部の概要

富山大学芸術文化学部（以下「本学部」という）は、昭和 58 年に開学した（旧）高岡短期大学を前身として、平成 17 年 10 月に富山県内の 3 国立大学（（旧）高岡短期大学、（旧）富山大学、（旧）富山医科薬科大学）の再編･統合により創設された。（旧）高岡短期大学と（旧）富山大学教育学部との多分野にわたる人的資源を最大限に活かし、従来の芸術系学部とは一線を画した学部として新設され、平成 18 年 4 月に第 1 期生を受け入れた。

富山大学の基本理念は、「地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、人間尊重の精神を基本に高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化、人間社会と自然環境との調和的発展に寄与する。（出典 : 国立大学法人富山大学学則第 3 条）」である。本学部は、人文経済、教育から医薬理工学に至る広範な学問研究分野をカバーする総合大学のメリットを活かしながら、（旧）高岡短期大学から培ってきた地域社会への貢献を重視した実務的、学際的研究を特色としている。

本学部は、芸術、工芸、デザイン、建築、材料科学、文化マネジメント、体育、情報処理、外国語（英語・中国語）を専門領域とする教員 52 名（平成 22 年 9 月時点）で構成されている。学部には研究を推進する組織として「研究部プロジェクト推進会議」を設置し、定期的に会議を開催して情報共有を図ると共に、地域や企業からの要請を「プロジェクト」として登録し、組織的な対応を図っている。

研究・制作活動の背景

富山県は、江戸時代から鋳物・漆器の伝統産業が盛んで、明治時代には北前船により全国に販売網を広げると共に、美術銅器が海外で高く評価され大きく発展した。さらに立山の豊富な水資源と水力発電を利用してアルミ産業等が興り、日本海側有数の工業集積地として地域経済を支えてきた。しかし、近年は長期不況や工場の海外進出に伴う産業の空洞化などによって、製造業縮小の方向へ産業構造の転換が進行し、それに伴って地域社会全体が衰退しつつある。かつて世界的な評価を受けた伝統的技術の継承が危機的状況にあり、抜本的かつ迅速な対応が求められている。

一方、人口減少社会における個人消費の動向として、こだわりや個人の趣味を判断基準とする多品種少量生産が傾向として現れている。さらに、文化やアートを活用した地域再生事業や、デザイン性を高めた商品が増加するなど、新しい生活スタイルの提案に基づく販売方法や感性を重視した高付加価値化への取組みが一般化しつつある。

21 世紀は、地球環境の保全が世界的課題となっているが、エネルギー消費を抑えて機能を充実させた製品や装置の開発ばかりでなく、多様な文化を理解し共生すること、心豊かな社会の形成を進めることが重要になっている。ものをつくりそれを販売することで成り立っていた社会から、ものに頼らなくても生活の利便性や満足感が得られる新たな産業の創出が求められている。

文化芸術振興基本法

文化芸術の振興についての基本理念を明らかにして、その方向を示し、文化芸術の振興に関する施策を総合的に推進するために、平成 13 年 12 月 7 日に制定された法律。該当する領域としては、①芸術 : 文学、音楽、美術、写真、演劇、舞踊その他の芸術。②メディア芸術 : 映画、漫画、アニメーション及びコンピュータその他の電子機器等を利用した芸術。③伝統芸能 : 雅楽、能楽、文楽、歌舞伎その他の我が国古来の伝統的な芸能。④芸能 : 講談、落語、浪曲、漫談、漫才、歌唱その他の芸能 (伝統芸能を除く)。⑤生活文化、国民娯楽及び出版物等 : 生活文化 (茶道、華道、書道その他の生活に係る文化)、国民娯楽 (囲碁、将棋その他の国民的娯楽)、出版物及びレコード等。

本学部にとっての芸術文化

「芸術」には、絵画、彫刻、音楽、舞踏、文学などがあるが、近年は写真や映画、CG なども含めて考えられることがある。一方、「文化」もさまざまなとらえ方があり、広義には歴史的な建造物や華道・茶道、あるいは服装や食事、慣習などが含まれる。それだけに、この 2 つの言葉が複合した「芸術文化」は、とらえ方が多様であり、定義が確立しているわけではない。

これからの我が国にとって、芸術や文化の振興が重要であるとの認識から平成 13 年に制定された法律は、「文化芸術振興基本法」と命名され、両者の位置は逆転している。これには、文化が芸術より広い概念であることから先に記載されたという説がある。しかし、この法律の前文には表現力や創造性の重要性が記載されており、同法律が芸術を起点としつつ、その活動領域を拡大してつくられる文化を概念としていることが伺える。このことから、芸術を先に記載した「芸術文化」に本来の目的が反映されていると考えられる。

「芸術」という概念が成立したのは 18 世紀のフランスとされるが、19 世紀になると高貴な精神的価値を実現する技術へと発展し、産業や庶民の日常生活とは対局に位置づけられるようになった。

しかし、大量生産・大量消費型社会が大きな転換期を迎えた今日、利便性一辺倒の価値観から脱出し、自己のアイデンティティを確認し、心の豊かさやひととの繋がりを求める手段として、芸術が持つ創造力、革新力、あるいは多様な価値への寛容力に対して大きな期待が寄せられている。

本学部が捉える「芸術文化」は、芸術の成果を活用して心豊かな文化を創生することである。絵画や彫刻などの芸術活動を洗練し、時代を反映した表現活動を行うと共に伝統工芸を継承し、これを次の世代に繋げる取り組みを推進する。地域に残された文化を再評価し、これを鑑賞するだけでなく、経済的利益やあらたな産業を創出する資源として活用し、まちづくりやコミュニティの活性化に資する活動に展開する。

研究・制作目標

設立の経緯やこれまでの実績、社会的背景や求められる芸術文化像を総合的に考え、本学部の研究・制作目標を次のとおり定める。

① 研究・制作の高度化・国際化

21 世紀の社会は『知性と感性の融合』が求められているとの認識に立って、研究・制作の理念を深化させると共に新たな観点からの考察や造形表現に挑む。芸術、工芸、デザイン、建築、材料科学、文化マネジメント、体育、情報処理、外国語 (英語・中国語) の各領域において、積極的な研究・制作活動を展開し、国内はもとより国際的に評価されるよう研究・制作の高度化・国際化を図る。

② 地域と連携した実践的プロジェクトの推進

地域社会が抱える具体的な問題を研究・制作課題とし、これらに対応する中で普遍的な知の蓄積を図る。多様な専門領域をカバーする学部であること、さらに 10 部局で構成された総合大学にあることを活かし、これまでの芸術系だけでは対応できなかった社会的課題を実践的プロジェクトとして組織的に取り組み、地域社会に貢献する。

③ 芸術の成果を活用して心豊かな文化を創生

芸術文化のあり方を探求し、芸術の成果を活用して心豊かな文化を創世することを目指す。芸術やデザインなどの知財活用、文化財の保存・修復、美術館や博物館、祭りやイベントなどの地域資源を活用した観光振興やまちづくり、個人のこだわりや趣味趣向を判断基準とするライフスタイルに対応したものづくりなどを『知的産業』と位置づけ、これらが社会に普及するための取り組みを推進する。